

# 真正な課題設定と問いかけにより、 課題に対する当事者意識を高める

## 義務教育学校の「総合的な学習の時間」



土佐山の魅力を伝える観光ツアーの予行演習をグループで振り返る。「階段が急なので、高齢者の手を引いた方がよい」などと、様々な意見が出た。後日、再び予行演習を行い、実際に商品化した。

### 土佐山学の概要

土佐山学舎では、1・2年生の生活科と、3～9年生の「総合的な学習の時間」を「土佐山学」と称して、9年間一貫したカリキュラムを編成している。そのすべての活動に「地域」「キャリア」「コミュニケーション」の3つのキーワードを織り込み、体験や交流によって得られる気づき・発見・出会い・探究心を基に、児童・生徒が主体的に考え、判断し、行動・表現する力を引き出すことをねらいとしている。9年生では、9年間の総仕上げとして、それまでの学びを生かした課題を毎年、設定している。

### ◎土佐山学の主な内容(例)

**ふるさと土佐山の川を守ろう(4年生)** 市内を流れる川の現状を調べ、自分たちでできることを考え、川を守る作戦を立てて漁業組合の人と一緒に実行する。

**伝えよう、木の魅力(7年生)** カンナで削った木のくずを使い、自分たちで作ったコサージュの普及に取り組み、森林を守り広める方策を考える。

**土佐山活性化プロジェクト(8年生)** 土佐山のPR方法を考え、地域の人と一緒に実行したり、模擬議会で発信したりした後、活動を振り返る。

### 私が訪問しました

高知県立  
高知西高校  
**西村芳江**  
にしむら・よしえ



◎教職歴18年。同校に赴任して8年目。グローバル教育部所属。SGH(\*)事業の高校2年生の探究授業を企画運営して3年目となる。高知大学大学院博士課程に籍を置き、分子生物学の研究を行う中で得られる実感から、探究活動に必要な要素を高校での授業にどう生かすかを考えている。

### 高知県立高知西高校

全日制/普通科・英語科/共学/1学年約280人/  
2019年度入試合格実績(現浪計): 国公立大は、筑波大、東京外国語大、岡山大学、広島大学、高知大学などに97人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ194人が合格。

\*文部科学省スーパーグローバルハイスクール。

### 私が案内しました

高知県・高知市立  
義務教育学校土佐山学舎  
**福井佳織**  
ふくい・かおり



◎教職歴25年。同校に赴任して5年目。研究主任。2017年度、高知県内の若手・中堅職員の良い教育実践を表彰する「土佐の教育実践表彰」を受ける。「土佐山学」(生活科、総合的な学習の時間)の実践と研究を行う中心的な役割を担っている。

### 高知県・高知市立義務教育学校土佐山学舎

持続可能な地域づくりに向けて高知市が策定した「土佐山百年構想」の一環として、地域の小・中学校が合併し2016年より義務教育学校となった。義務教育9年間で、前期4年、中期3年、後期2年に区分し、発達段階に応じたスモールステップによるカリキュラムを展開。

\*義務教育学校のため、小学校1年生～中学校3年生を1～9年生と呼称する。

\*1 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。

**西村** 本校の「総合的な探究の時間」は、SDGs（\*1）を切り口に課題を設定していますが、課題を自分事とするのに苦労する生徒もいます。今回見学した、「総合的な学習の時間」の「土佐山学<sup>とさやまがく</sup>」では、9年生が自分たちで企画した「土佐山観光ツアー」を成功させるため、前時に行ったツアーの予行演習を振り返っていました。「降雨時、参加者にはどこで待機してもらうのか」などと、どの生徒も、当事者意識を持って意欲的に改善策を話し合う様子が印象的でした。

**福井** このツアーは、地域住民や旅行会社などの協力を得ながら、実際に集客を行い、有料で催行します。当日のガイドも生徒が行います。教師が設定した真正な課題に取り組み中で、生徒は自分たちの言動が実社会に影響を与えることに気づき、自分なりの考えを積極的に伝え合おうとする姿勢が生まれます。

**西村** そうした姿勢を義務教育段階から身につけ、高校で発展させていくことで、より高度な探究課題に対しても主体的に取り組めるようになりますね。中学校と高校では課題設定の仕方に違いはあるものの、生徒の当事者意識を高めることの大切さは共通しているようです。

真正な課題設定によって学びが社会に影響を与えることに気づかせ、教師の問いによって自分事にさせていく流れが分かりました



当初の単元計画から大幅が変わっても、課題が生徒自身のものとなるまで待ちながら、様々な問いを投げ続けます



**福井** 授業では、「生徒からこんな発言が出てきたらいいな」というイメージを持ちながら、生徒が「自分たちが解決する！」という気持ちになるまで、何度も問いかけ、待つことを心がけています。先ほどの授業でも、世の中には様々な立場の人がいて、そのことに配慮する大切さに気づいてほしいと考えていました。すると、観光スポットまで坂道が続くため、参加者には歩きやすい靴を準備してもらうなど、装備面での注意喚起をする必要性に気づいた生徒がいたので、それ

だけでなく、高齢者や体の不自由な人が参加した場合への配慮の必要性にも思いを馳せられるように、「どんな人が申し込んでくると思う?」「ガイド役の人は事前にどんなことを案内すればよいか?」などと問いかけました。

**西村** 福井先生が問いかけを繰り返して生徒の考えを深めさせる様子から、思考が熟するのを待つ大切さを改めて感じました。また、生徒が答えに詰まった時、その課題は誰のため、何のためなのかという上位目的に立ち返る問いを何度も投げかけていたことも心に残りました。今日の学びを踏まえて、課題に対して生徒がより主体的にかかわることができるような指導を追究したいです。

今日の学びを  
自校の指導につなぐ  
教科の枠を超えて  
教師が連携しながら、  
探究学習を推進したい



土佐山学舎では、「土佐山学」を柱に据え、各教科だけではなく、行事等も含めたカリキュラム全体で生徒を伸ばす体制が確立されています。各教師が教科の垣根を超えて相互理解を深めて連携すれば、生徒は学びの意義を一層理解し、探究学習の質も高まります。そうした体制を実現するには、学校全体で方向性や取り組みを共有することが必要だと実感しました。どのような生徒を育てたいのか、地域とどのようにかわっていくのかといった学校教育の原点に立ち戻りながら、「総合的な探究の時間」だけにとどまらず、学校という組織の中で、できることを考えていきたいと思います。



旅行会社の社員からのアドバイスを基に、自分たちの企画をどのように改良するとよいかを話し合った。福井先生は、誰の、何のためのツアーなのかを生徒に問い続けることで、生徒の当事者意識を高め、改善策が生徒から活発に出される場をつくり上げていった。